サリー・モーガン講演会「アボリジナル文学」

竹内　佑利子

平成三年度前期の神奈川大学オセアニア研究センターの活動報告をいたします。

＊オーストラリア大使館ロス・ウェストコット氏より、オーストラリア関係の蔵書収集のために三千豪ドルが寄付された。七月四日、平塚キャンパスにおいて松岡紀雄教授、木川事務部長出席のもとに贈呈された。今後図書課と協力して、オーストラリア関係の図書を購入し、カタログを作成し、学生、研究者の便宜をはかることになった。オーストラリア大使館に深く感謝申し上げます。

＊豪日交流基金より、オーストラリアで出版された最新の図書五〇冊が寄贈された。これは当面は竹内研究室のオセアニア関係本棚におくこととする。利用日は火、水、木とする。豪日交流基金図書室に心から感謝申し上げます。

＊西オーストラリア州の画家、作家であるサリー・モーガン氏講演会が、平成三年七月四日午後一時半から三時まで開催された。

講演者のサリー・モーガンさんと令嬢のアンバーさんが、ウェストコット所長に伴われて来学された。アンバー・モーガンさん、ウェストコット氏、藤原鎮男知識情報研究所所長、相馬純吉理学部教授、オセアニア事情受講生が熱心に聴講した。

講演が終わって、藤原教授が日本人にはあまり知られていないテーマについての講演に対する謝辞を述べられた。その後、現代の文化多元オーストラリア社会におけるアボリジナル文化復興の真髄に関わる質問が出た。

講演会実現までに、豪日交流基金在日事務所所長ロス・ウェストコット氏および玉井祥子さんにひとかたな

らずお世話になった。『マイ・プレイス』を訳出中の加藤めぐみさんが、講演者の紹介の労をとって下さった。センターの活動を支持して下さる皆様に、厚くお礼を申し上げます。

ロス・ウェストコット氏（豪日交流基金在日事務所所長、オーストラリア大使館広報担当官）

皆様こんにちは。日本の方にオーストラリアへ関心を寄せて頂くことが、私の仕事の大きな一部となっております。オーストラリア学というのでしょうか、日本の各大学でオーストラリアのことを学ぶ機会が多くなればと願っております。そういう勉強ができる大学はまだ少ない、というのが日本の現状です。オーストラリアという国は、日本にとって経済面をはじめ文化面など、いろいろな方面で大切な国ですが、日本の関心はどちらかといえば、南よりも欧米など北の方に向けられているという状況です。もう少し南半球に目を向けて頂ければと願っております。それではほんのわずかですけれども、本を寄贈させて頂きました。そして今日の講演者を日本に呼びました。この機会に皆さんのオーストラリアに対する関心や理解を深めて頂けるのではと考えております。

今日の講演者はとてもすばらしい方です。白人にとっては大変恥ずかしい話がこれから出ます。オーストラリアにおける人種差別という問題が、大きなテーマになりますけれども、オーストラリアに関してのみならず、どこの国でも通用する、考えさせられる問題がたくさんあるように私は思います。どうぞ最後まで話をお聞き下さい。ありがとうございました。

加藤めぐみ先生（元本学講師）

今日神奈川大学にサリー・モーガンさん、お嬢さんのアンバーさんをお迎えできたことを大変うれしく思っております。モーガンさんは、西オーストラリア州のパースからいらっしゃいましたが、オーストラリア国内はむろん海外でも大変有名な方です。一つには画家であるということ。モーガンさんはオーストラリアの原住民アボリジナルの血を受け継いでいるので、アボリジナルの伝統的な技法を使って、絵を描いておられます。もう一つは作家であるということ。モーガンさんの絵を表紙に使った本、『マイ・プレイス』という本を、一九八七年に出版されました。続いて『ワナムラガニャ』を九〇年に出版しました。『マイ・プレイス』は、モーガンさんの祖母、母、大叔父（祖母の兄）そしてご自身の、アボリジナルとして生きたことの物語です。アボリジナルがどのような暮しをしてきたか、どのような目に会ったかを、家族の歴史としてお書きになったものです。この本は出

版されて以来たちまちベストセラーになって、オーストラリアじゅうで読まれるようになりました。子供用の版、ペーパーバックも出ています。続いて出た『ワナムラガニャ』は、ジャック・マクフィというモーガンさんのお祖父さんの一代記です。これも今たいそう評判になっています。この七月に、銀座のギャラリーで西オーストラリア州の絵の展覧会が開かれ、モーガンさんの絵も展示されています。本日はアボリジナルの文学について、文化や歴史をおりまぜてお話しして下さいます。

サリー・モーガン講演会
Lecture by Ms. Sally Morgan

本日神奈川大学にお招きを受けて、大変うれしく存じます。私が英語で話すことをお許し下さい。私は日本語が話せません。私が言いたいと思っていることを、ゆっくり話しますので、理解して頂ければ幸いです。

日本に来たのは初めてです。日本はとてもすてきで、大好きです。日本人はフレンドリーで、親切です。

本日はアボリジナルの文学についてお話ししたいと思います。が、その理解を助けるためには、オーストラリアにおけるアボリジナルの歴史についても触れなければなりません。ヨーロッパ人がオーストラリアに住むようになってから、まだわずか二百年しか経っていません。その間、私の同胞はひどく虐げられました。

私たちの歴史は悲しみに満ちています。ここでジャック・デイヴィスの詩を読みましょう。詩は、その悲しみをうたっています。ジャック・デイヴィスは、著名なアボリジナルの詩人です。アボリジナルは、地球が自分たちの母であると信じていました。ですから、詩は、母なる大地が、生命を落とした子供たち――アボリジナル――を悼んで泣いているさまをうたいます。詩のタイトルは、「ファースト・ボーン」、これはオーストラリアの大地に初めに生まれた者という意味です。

「初めに生まれた者たち」ジャック・デイヴィス
The First-born by Jack Davis

わたしの　初めに生まれた者たちはどこ　褐色の大地
は　ため息をつく
わたしの　子宮から生まれ出た者たち　はるか大むか
しに
わたしの　土くれから　創られた――なぜ　なぜ　か
れらは泣いている
かれらの　はなつ光は　なぜ弱よわしい

わたしは　耳を澄ませ　かれらの笑いごえを　きこう

とする
わたしが　あたえた　掟や伝説はどこに
なにが　起きたのか　話しなさい　後で産んだおまえ
たちに　きいているのだ

いまでは　かれらの霊が　洞穴のなかに　住まうのみ

おまえは　黙す　ひるんで　答えない
問いは　おまえの顔面がくらった一撃
答えは　おのずから　死に絶えつつある者を見れば
わたしの　誇りたかい黒いひとびとの死と　無視され
ているのを見れば　わかる

アボリジナル文化は、地球上に現存する最古の文化です。アボリジニーズは、少なくとも四万年前から、オーストラリア大陸に住んでいたという説が有力です。しかし研究がすすむにつれ、十万年もの昔からアボリジニーズが大陸を占有していたという論議もなされています。ですから、人間が大陸に住み着いてから現在までを時計に例えると、六〇分のうち五九・五分は、大陸はアボリジナルの占有下にあったのであり、ヨーロッパ人の占有は三〇秒以下にしかなりません。

共通のアボリジナル語というものはありません。多くの言語があり、各言語に方言があります。同じようなことばが、言語によって意味が大きく異なる場合もあるので、ことばの使われ方や発音に、気をつけなければなりません。そうしないと、困ることになるときもあるでしょう。

多くのアボリジナルが複数の言語を話します。私の祖父は五つの言語を話し、七つの言語で歌い、それに英語も話します。教育を受けたことはありません。独学で読み書きを覚えました。砂糖の袋やジャム岳のラベルの文字を写し取って勉強したのです。ではあなたは、いくつの言葉を話すことができますか、と聞かれると、恥ずかしいのですが、私は英語しか話せません。祖父は、祖母の（部族の）言語を私に教えようとしましたが、私はいい生徒ではありませんでした。祖父は、私の舌は祖母の言語をマスターするには硬すぎるんだよ、といいました。それはあたっています。

何千年もの間、アボリジナル社会は口伝えの伝承に頼っていました。歴史や文化は、文字や本を使ってではなく、語りで代々伝えられました。アボリジナルの部族文化の核は、音楽、踊り、ストーリーテリング、それに祭儀です。伝統的な祭りや神事は、いまでも行われています。現代アボリジナル社会は、ヨーロッパ的なものも取り入れた芸術表現を創りだしています。

陶工、画家、歌手、舞踊家、俳優、彫刻家、劇作家など、多くの分野で活躍するアボリジナルがいます。現代アボリジナル社会がもつ大切な強さのひとつに、アボリジナルの人々に普遍的に備わっている創造力があります。例えば、私の出身地西オーストラリア州にあるアボリジナル・シアターは有名です。著名な劇作家はすべて、西オーストラリア州出身です。今詩をご紹介したジャック・デイヴィスは、劇作家でもありますが、彼の戯曲はオーストラリア全国のみならず、ロンドン、スコットランド、カナダでも上演されました。私も戯曲を書いています。これは来年オーストラリアで初演されるみこみです。

教育の機会がなかったために、アボリジナルの芸術家たちの多く、とくに年長の芸術家たちは、正式のトレーニングを受けていません。彼等は表現への内なる欲求に突き動かされて、様々の異なった芸術の分野で活躍してきました。アボリジナルがきちんとした教育を受けられるようになったのは、ここ三五年ぐらいのことです。ですからその前の人々は、みな独学でした。私の大家族のなかにも、高い教育を受けた者と、読み書きもできない者とがいます。これが大方のアボリジナルの家族の実状です。

アボリジナルの歴史にはとても複雑な面がありますから、アボリジナル文学の成長を、歴史を知らずに外部の人が理解するのは、困難です。アボリジナル文学の多くは、政治的自由、アイデンティティの確立、人権闘争を映し出しています。オーストラリアは、国家としての体をなしてきてからずっと、非ヨーロッパ人種の文化を、受容しかね評価しかねておりました。これこそアボリジナルが経てきた体験といえるでしょう。けれど、考えてみれば、アボリジナルは大きな都市も築かなかったし、図書館も建てなかったし、りっぱな研究機関も設立しなかったのですから、しかたなかったでしょう。その代わりにアボリジナル社会が重きをおくのは、家族、共同体、精神的な価値観、自然との調和のとれた関わり方です。

大地と自然との密接な結びつきは、アボリジナル社会において、つねに重要でした。「大地はあなたのものではない。あなたが大地のものなのだ」という教えが、伝えられています。大地を資源が眠っているところとみなすのではなくて、大地は生きて呼吸をしている存在、生きとし生けるものが流れ出る源であるとみなされてきました。部族ごとに、特別に精神的な意味をもつ特別な土地というものがあり、そのような深い霊的な意味のある土地は、尊敬し手入れをおこたってはいけない対象になっています。そのような土地は、ときに聖地と呼ばれます。日本でも、それぞれの神社や寺は聖なる場所とされ

ているようです。アボリジナルの人々にとっても、特別に神聖な場所や岩や木があるのです。現在多くのアボリジナルが、伝承文化との結びつきが薄くなり、都市住まいをしているとはいえ、個々の大地と生きものたちに寄せる私たちの思いには熱いものがあります。

そんな気持ちが、ジャック・デイヴィスの詩「大地」に描かれています。ジャックは昔ながらの部族のしきたりに従って育てられた人ではありませんが、長い年月を、オーストラリア奥地ですごしました。彼はいまはフリーマントルで町住まいをしていますが、物理的な意味での環境に対して、深い思いを抱いています。それがあらわされている詩を読みます。

「大地」ジャック・デイヴィス
Land by Jack Davis

おお　白いひとよ
どうしたら　わかってもらえるのか
この　大地への愛を
子の　指さきが
母の　くちびるに　ふれるあの感触
大地の　愛らしさは　夏の赤
うすもも色　かすかな黄金
母なる太陽が　夜の衣に
みずからを　たたんで沈み
黒いひとびとの国の　夢幻時代からとどく
星ぼしの　光にうきぼりにされる　あの彩り

つい最近まで、アボリジナルとは何か、アボリジナルのアイデンティティは、アボリジナル自身ではなく、その時どきの政府が定義しました。ヨーロッパ人が渡来するまで、アボリジナルは一様に黒い肌をしていました。いまでは、私たちの肌は、とても黒っぽい色からとても薄い色まで、多様です。ヨーロッパ人との混血で、肌の黒さが薄まったために、政府はアボリジナルの定義を肌の色の度合によって、細かく決めることにしました。そのさいに使われる用語は、ハーフカスト（片親がアボリジナル、片親が白人）、クオーターカスト（四分の一アボリジナル）、クオドルーン（四分の三アボリジナル）などです。このようなことばによって、オーストラリア政府は人種を定義し、現在の同化政策の基礎としました。そのときの政策立案者たちは、どの民族、どの文化も尊重され保存されなければならない、なぜならどれもが独自性をもっていて人類に貢献できるからだということを、理解していませんでした。

ヨーロッパ人が最初に移民した一七八八年以来、多くのアボリジナルが新たにもたらされた伝染病や大量虐殺

や虐待や強制移住が原因で死にました。これはよいことだというのが、ヨーロッパ系の多数派の見方でした。アボリジニーズは類人猿だと、みなされていたからです。ヨーロッパ人は自分たちを、進化の過程でもっとも進んだ段階にあると位置づけていました。そしてアボリジニーズは、いちばん下にいるのだと。アボリジナルの部族構成員の減少は、たいした問題ではないというわけです。このような開拓初期、ヨーロッパ系の人々は自分たちの肌の色に優越感をもっていました。ですから黒い肌の死は、白いオーストラリアのイメージにぴったり合ったのでした。こういう考え方から、抑圧的で破壊的な数々の政策が、アボリジナルに対してとられました。政府は、オーストラリアは容易に白人のみの偉大な国家になるだろうと決めこみ、移民政策を規制し、アボリジナルの黒い肌の色を薄めようとしました。

一九〇〇年代初期から、ヨーロッパ系の血がまじった子どもたちは、アボリジナルの母親から取り上げられ、孤児院や政府管轄下のセツルメントや宣教師の施設に入れられました。当時の政治家は、アボリジナルの母親の母性愛は、白い母親のそれほど深くないと信じていました。ですから子どもを黒い母親の腕からもぎとることに、罪悪感をかけらももっていませんでした。アボリジナルとヨーロッパ系の両方の血をひく混血の子どもは、アボリジナルの家族やその文化とまったく接触しないで育てられるべきだと決められたのです。そうすれば、子どもたちはヨーロッパ的な暮し方、考え方をするように育つだろうというのでした。オーストラリアじゅうで何千人もの子どもたちが母親からはなされて、自分が誰か、どこの出身かも知らないで、施設で大きくなりました。この政策がもっとも厳しく実行に移されたのは、今世紀の三〇年代、四〇年代でした。そして六〇年代まで続きました。家族から子どもをはなすのは、何と七〇年代初めまで行われていたのです。

私の祖母も母も、この政策の犠牲者でした。著書『マイ・プレイス』のなかで、私も含めて三代にわたる女の歴史と体験をたどりました。この本から、まず母の物語の一節を読みます。母は三歳のときに祖母からひきはなされて、パーカヴィル・チルドレンズ・ホームに入れられました。母は、いちばん古い記憶についてこう語っています。

『マイ・プレイス』サリー・モーガン
My Place by Sally Morgan

「母からはなれて、パーカヴィル・チルドレンズ・ホームに連れていかれたときのことは、覚えていない。でもわたしのまぶたには、三つか四つの、まるまるし

た子どもの姿が焼きついている。その女の子は、ホームのヴェランダにすわって、鼻をたらして泣いている。それが、パーカヴィルに初めて連れていかれたときのわたしだったと思うんだよ」

次は母が十代の娘だったときの話です。母はもうホームから出て、祖母といっしょに暮らしていました。一九四〇年代です。

「ある日曜日のこと、停留所で、バスがくるのを待っていた。友だちの家へいくところだった。そこへ女の人がきた。わたしたちは同じバスを待っていたものだから、おしゃべりを始めた。

〝なんてきれいなお嬢さん〟女の人はいった。〝どこの国の方。インド？〟

〝いいえ〟わたしはにっこりした。〝アボリジナルです〟

女の人はショックを受けて、わたしをまじまじと見た。

〝まさか〟

〝ほんとです〟

〝まあ、かわいそうに〟女の人はわたしの肩を抱いていった。〝まあ、あなた、いったいどうするつもり〟

わたしは何といったらよいのかわからなかった。女の人がわたしをかわいそうでたまらないといったまなざしで見るので、わたしはすごく居心地が悪かった。アボリジナルでどこがいけないのと、わたしは戸惑った。だからわたしにどうしろとこの女の人はいいたいのだろう、わたしは心の中で思った」

祖母の物語からも引用します。祖母の時代、アボリジナルの女性にとって生きることがどんなに辛いものであったかを、理解して頂けるだろうと思います。最初の一節は、祖母が生家と家族からはなれたときの様子です。祖母は人里はなれた土地の大家族のなかで育ちました。アボリジナルの言語を二つと、英語もいくらか学びました。住んでいたのは大牧場です。祖母の大家族はみな牧場主に雇われていましたが、給料はなしでした。祖母は、牧場のお屋敷で料理や家事をしこまれました。牧場主が都会に引っ越すと決め、家事をする召使が必要だったので、祖母を連れていくことにしたのです。祖母の母が、もっともな理由がなければ娘を手放しはしないだろうと、牧場主は知っていました。ですから彼は、祖母の母親に、娘にパースで教育をつけてやるといったのです。それでも祖母はいきたくないといいました。けれど、祖母の母は、ヨーロッパ式の教育を受けたことがないので、読み書きができるようになりたいと願っていました。娘が帰

ってきたら読み書きを自分に教えてもらえる、と期待をかけたのです。これは実現されることのない約束でした。

「教育をつけてやろうっていわれた。ご主人は学校へ行かせてやるんだってふれまわった。母親は、わたしに、白人のように読み書きを覚えられればいいねって。それから戻ってきて、母さんに教えてちょうだいっていった。わたしの母親に、よくもそんな嘘がつけたもんだ。家を出るとき、わたしは泣いた。みんな、泣いた。母親は頭をたたきながら泣いていた。わたしは、かあちゃん、かあちゃんって叫んだ。母親はいったよ、母さんを忘れるんじゃないよ、タラフ。みんなして、何ども何どもわたしの名を呼んだ。わたしは泣けて泣けて、かあちゃんって、叫びつづけた。

パースではいつも、かわいそうな老母のことが頭からはなれなかった。わたしが教育を受けていると、そう思いこんでいるのだろう。ここで起きていることを、伝えたかった。わたしがしてることといえば働くだけなのよといいたかった。わたしは教育なんて受けていません、と。でも、どうやってそれを伝えられるだろう。わたしは手紙を書くことができないし、代筆をしてくれるひともいないのだから。

夜ごと、わたしは横になって自分の部族のひとたちのことを考えた。キャンプファイアが見え、家族の顔や母親のやさしい顔が見えた。家族がなつかしくてたまらない。毎晩のように、わたしは泣き寝入りした。

ときどき、夢のなかで、家族が泣いているのをきいた。タラフ、タラフ、タラフ。わたしは起き上がって、かあちゃん、かあちゃんと叫んだ。

だってわたしには家族が必要だった。家族はわたしがいなくてはならないひとのように、わたしが家族の一員であるというように、感じさせてくれるから」

次に読むのは、私の母が祖母のもとからひきはなされたときの、祖母の気持ちです。母の名前はグラディです。

「グラディが三歳だったか、わたしのもとから連れ去られた。それは予期していたことでもあった。わたしの雇い主は、グラディには教育をつけなくてはといっていたから。で、グラディをパーカヴィル・チルドレンス・ホームに入れた。わたしに何ができるだろう。何かいおうと思っても、恐怖がさきに立つ。グラディを、手元においておきたかった。わたしにはグラディしかなかったから。でもそうはさせてもらえない。雇い主は、グラディまで養えないという。そしておまえは恩知らずだという。雇い主は、わたしの血と肉をわ

けた子どもを手放させ、しかも感謝しろというのだ。肌が黒いと、感情をもつのも許されないのかね。グラディが連れ去られたとき、わたしは泣いた。グラディはまだ幼くてものがわからない。また帰ってこられると思っている。ピクニックにいくだけなんだって。わたしは川のほとりの自生の竹やぶまで走っていき、地面をたたいて泣いた。自分の子どもを失って平気でいられる母親なんているわけがない」

グレニズ・ウォードの『ワンダリング・ガール』も紹介しましょう。自分の少女時代のことを書いた本です。グレニズは、ワンダリング・ミッションで育つのがどういうことかをつづっています。それから、十代の娘が牧場の一家で働かされる気持ちも書いています。ワンダリング・ミッションは、アボリジナルの子どもたちが送られた施設の一つです。ドイツ人の牧師たちによって規律正しく運営されていました。子どもたちは、家族との往信をまったく許されませんでした。グラニズが初めてミッションから出されて、牧場へ奉公を始めたときの一節を読みます。彼女の雇い主ビゲロー夫妻がお茶を飲んでいる場面で、グレニズはどきどきしています。一九六〇年代、アボリジナルはまだ法的に市民と認められていない時代です。

『ワンダリング・ガール』グレニズ・ウォード
Wandering Girl by Glenyse Ward

「ビゲロー奥様は美しい紅茶茶碗にお茶をそそぎました。私もああいうお茶碗でお茶をいただけるのかな。でもテーブルには紅茶茶碗が二組だけ。奥様がキチンの左隅にある戸棚のほうへいらした。ああ、うれしい。私の紅茶茶碗を出してくださるんだわ。でもびっくり、奥様は古ぼけたブリキのコップをもって、テーブルに戻っていらしたのです。それにお茶をついで、私の前におきました。奥様は私のあっけにとられたような表情をごらんになったにちがいありません。私はミッションで厳しくしつけられました。ふだんは話しかけられないかぎり、口を出しません。私はていねいに、紅茶茶碗でお茶を飲ませてくださいませ、ともうしあげました。なぜなら、ブリキのコップでお茶をいただいたことはないし、ミッションでもそういうことはしませんでしたから。奥様から、激怒していることがわかる声で答えがかえってきました。奥様のおっしゃるのによれば、私がここにいるのは、奥様の黒い召使としてなんだから、命令に従い、いわれた通りにしていればよろしいということでした。私はブリキのコップからお茶を飲みましたが、頭のなかはすっかり混乱して

いました」

長い年月、アボリジナルの人々、とくに女は老いも若きも、人間というよりは所有物とみなされていました。女は長時間働かされ、給料もなし、幸いにもらえたとしてもほんのわずかでした。雇い主の権威にはむかったりすれば、いやというほど懲罰を受けました。奥地の牧場や農場にもらわれていった女は、男の雇い主に性的なつとめを果たすことも当然とされていました。女たちが、いずれ妊娠してもとの施設にもどされる事態が多かったという意味です。女たちが赤ん坊を産むことは許されていました。けれど、その子どもたちは母親からひきはなされ、母親は仕事をしなければなりません。こうしてまた同じことが繰り返されました。

いままでにご紹介した作品によって、アボリジナルの書き手たちは、自分の人生について、家族について、過去について書いていることがおわかりでしょう。現代のアボリジナル社会には、いまだに消えた係累をたどる家族であふれています。人々はいまだにアイデンティティを模索しています。自分史を書くことは、過去を蘇らせ、家族の出自を見つめ、アイデンティティを確立する手だてともいえます。各人の自分史は、より広いアボリジナル史の反映です。なぜなら、迫害の政策は、すべてのアボリジナルに加えられたものだからです。

アボリジナル文学がヨーロッパ文学の形態を取り入れるようになったのは、ここ二五年のことです。オジュルー・ヌーナクルが、最初の詩集を出版したのは、一九六四年になってからでした。それ以前にはアボリジナルの作品の出版に関心がもたれませんでした。また、忘れてならないのは、何十年もの間、アボリジナルの子どもたちは、公立学校へ就学することができなかったことです。田舎には、アボリジナルの子どもを受け入れる学校がありました。しかしそこでも、たった一家族であれ、白人から抗議が出れば、アボリジナルの子どもは退学させられました。

ここでオジュルー・ヌーナクルの詩を読みましょう。「過去」というタイトルです。アボリジナル文学者が直面する批判は、過去に重きをおきすぎるのではないかというものです。多くの人々が、過去なんか忘れなさい、どうして文学者たちは繰り返し繰り返し過去をつづるのか、と。私がそれに答えるとしたら、たぶんこうなるでしょう。過去をきちんとおさえないで、どうして未来に希望がもてるのですか、と。過去をみつめ、過去をきちんと踏まえていくことによってのみ、過去はあなたを締めつける力を失うのです、と。ですから、この詩のなかで、過去はけっして死んでいない、なぜなら過去は内な

る生命をもっていて、現在の私たちの鋳型を作っているのだからと、詩人はいいます。

「過去」オジュルー・ヌーナクル
The Past by Oodgeroo Noonuccal

過去は死んだ　などと　だーれーにーも　いわせまい
過去は　まわりにも　内にも　ある
部族の記憶に　まとわりついている
このちっぽけな今　たまさかの現在が
わたしのすべてではない　長い時間をかけ　過去をいっぱいとりこんで　わたしは創られたのだ　それを
わたしは知っている

今宵　郊外のわが家
ソファにかけ　電気ヒーターの
赤い炎に　あたためられ　わたしは夢にはいる
遠くにいる
ブッシュで　焚火をかこみ
仲間と　地べたにすわり
壁はない
星ぼしが　頭上に
まわりの高い木々は　風をそよがせ
木々の音楽を　かなでる
柔らかな　夜のさけびが　とどく
太古の生きものたちみなと　一つになるところ
知られたもの　知られざるものの
われわれの　いるべきところ　もはや忘れられたところ
ふかふかの椅子　ヒーターは
わずか　昨日からのもの
千もの　森の焚火は
わたしの血に　流れている
過去は過ぎさったなどと　だれにもいわせまい
「今」は　時の小さなかけら　小さな一部
わたしの鋳型となった　すべての部族の歳月の　かけらにすぎない

アボリジナル作家による小説が出版されたのは、一九六五年になってでした。いまはマドルルー・ナロジンというアボリジナル名で知られる、コリン・ジョンソンの『ワイルド・キャット・フォーリング』です。これは田舎町のはずれで育つアボリジナルの若者の話です。小説は、アボリジナルの若者が今日の社会で体験する問題と闘争について語ります。以来マドルルーは、小説、詩、アボリジナル文学の評論を出版しています。彼の書いた『フリンジ』から引用します。

『フリンジ』マドルルー・ナロジン
The Fringe by Mudrooroo Narrogin

「アボリジナル作家は、あいまいに存在している。白人は、アボリジナル作家は白人社会、つまり侵入者の世界にむけて書いているのだと思っている。奇妙な運命ではないか――同胞ではない者、ストレンジャーのために書くなんて。同胞を征服した人々のために書くとしたら、これはさらに妙な運命だ」

これが、アボリジナルの書き手が一様に抱えている問題、ジレンマだろうと思います。自分のアイデンティティに、文化に、同胞に、いかに誠実であることができるか。そういう文脈のなかで掘り下げて書き、そのうえアボリジナル文化や概念を、アボリジナル社会の枠をとりはらって広く読者に伝えるにあたって、いかに誠実であることができるか。

膨大な量の初期のアボリジナルの作品が、未発表のままですが、それらは請願など書類などの形式で書かれています。土地を返してほしい、正義と平等を欲するなど、アボリジナル文学の底流には政治問題があり、これはいまでもまだ通用しています。

一九六七年、国民投票によってアボリジニーズはオーストラリア市民となりました。それまで私たちには、法により定められた立場もなく、自分の国にいながらエイリアンでした。アボリジニーズは、ノー・マンズ・ランド（性格、所有者のあいまいな土地、戦場）に暮らしていたようなもので、合法的な権利はほとんどもっていませんでした。土地や家畜の所有は許されず、賃金も奨学金も受けとれず、国内を自由に移動できず、公立病院や学校に入れず、選挙権もわが子の親権もありませんでした。

第二次世界大戦時に、アボリジニーズは唯一平等というものに近づきました。それは、一九四四年の市民法によってでした。現在のお年寄りの多くが、家族がもっとましな扱いを受けることを願って、この法律の下で、市民権を得ようとしました。この時代には、市民権を得るために、法廷へいかねばなりませんでした。医師から判事に、性病などの病気にかかっていないと証明してもらい、ヨーロッパ系の保証人を立てなければなりません。そのうえ白人と同じように暮らしますと、約束しなければなりませんでした。

市民権を得たのちは、姓名とID番号が記され、写真を貼った小さなパスポートの携帯義務があります。それを見せないと、酒場でお酒も飲めませんでしたし、午後六時以後外に出ていることもできませんでした。市民権

は永久のものではなく、酔ったり、服役したり、市民権の証明のないアボリジニーズにアルコール飲料を買ってやったり、深いつき合いをしたりすると、取りあげられました。近い親類のなかに、証明書をもっていない者がいる場合は、その人とはつき合うのを禁じられていたということです。

ここで私の二冊目の本『ワナマラガニャ』、ジャック・マクフィの伝記から、一節をご紹介したいと思います。ジャックは私の祖父で、いま八五歳です。彼は市民権についてこういっています。

『ワナマラガニャ』サリー・モーガン
Wanamurraganya by Sally Morgan

「昔は、自分がオーストラリアの市民でないかもしれないなんて、考えたこともねえ。この国で生まれたもんはみなオーストラリア人だと思ってた。わしの母親は白人が一人もいないときから、ここにいたんだから。自分の国でストレンジャーだとみなされるなんて、考えつきもしないこったよ。警官は、この新しい市民権てなもんを得ないと、本物のオーストラリア人とはいえねえんだぞと、わしに説明しよった。

〃じゃあ、いったいナニジンなんで？〃 わしはたずねた。

〃知らん〃

〃じゃ、移民とでも？〃

〃とも、いえんな。移民は市民になるからな〃

〃てことは、市民権をもらわんやつは、ナニジンでもない？〃

〃そうさな、法に照らせば、ナニジンでもないわな〃」

次の一節で、ジャックは、妻のスージーと市民権を取得しに法廷へいく当時の様子を描写します。

「法廷へいく日、わしらはそりゃあびくびくしてた。みこみはありそうなものの……市民権をもらえないんじゃないかと、おびえていたね。わしはいちばんいい服を着こみ、スージーもそうして、二人とも礼儀ただしく口をきくとか、そんなことに気をつけた。法の番人殿は、わしの名前をきき、どこで働いているかとか、ぜんぶ殿の前にある紙に書いてあるのに、とにかくきいてくる。それから、いった。

〃白人のように、暮らすか、お前も妻も？〃

〃はいです〃

〃酔っぱらうことはあるか？〃

〃一度か二度、ともだちとやりました〃

〃市民権をいただいたら、原住民に酒をふるまうか

ね？〃

〃いいえです〃

〃お前の暮らし方をのべなさい〃

わしがそれをのべると、法の番人殿はいった。

〃大丈夫そうだ。合格だ〃

と、いうわけさ。

わしらは仲間うちでこの洗いざらいを、ジョークの種にしていいあった。くだらんかぎりだったが、そうは思わないやつらもおおぜいいたようだよ。」

私たちを虐げる法律が廃止されたと申し上げることができて、とてもうれしく思います。アボリジニーズは、いまや他のオーストラリア市民と同じく、法の下では平等です。しかしながら、真の平等は、法律よりも心の問題だと思います。この種の平等はまだこれから実現されるべきものです。共同体として、私たちは、またオーストラリアは、過去の後遺症をかかえています。そして過去はまだ死に絶えていません。それは生きて、私たちの国の鋳型を、私たち個人の鋳型を作り続けるでしょう。私たちが振り返って、真正面から見つめないかぎり。

それぞれの国家がそれぞれの歴史のなかに、できれば認めたくないことをもっています。オーストラリアにとって、アボリジナルの人々への迫害がその一つです。それでは、こんにちの私たちのアボリジニーズはどこから始めたらよいのでしょうか。そうですね、まず私は喜びをもって、もはや白豪主義はオーストラリアの政策ではないのだと申し上げます。オーストラリアは、世界でもまれな文化多元主義、多民族主義の国です。私たちは、ヨーロッパに属する国の一つではないことを理解するようになりました。私たちはアジア太平洋地域に属しているのです。ですから、近隣の人々ともっとひんぱんに接触し、ひんぱんに文化交流を行う必要があります。

世界は日ごとに狭くなっていくように思えます。それに反してグローバルなレベルの問題は、日ごとに大きくなっていくように思えます。これは環境問題においてとくに顕著なようです。私たち人類がこんにちもっとも必要としている特性は、勇気ではないでしょうか。

最後にジャック・デイヴィスの「骸骨」という詩を読みます。これをおもしろいと思ってくださるとうれしいのですが。ずっと昔に人類学者が集めた、膨大な量のアボリジナルの骨標本が詩のテーマです。海外にもアボリジナルの骨標本のコレクションはあって、私たちはいまそれを取り戻そうとしています。ジャックは博物館に入って、自分の先祖の骸骨を見たときの気持ちを詩にうたっています。詩のなかで、骸骨が、生きて呼吸をしていた人間だったとき、どんな人生を送ったのかと想像して

みます。それから、詩の終わりに、骸骨が口をきいて、ジャックに未来を見つめなさいと助言したように思えると、うたいます。

「骸骨」ジャック・デイヴィス
Skeletal by Jack Davis

あなたは興味深い
博物館のケースのなかの　古い骨
カードに……これはアボリジナル種族の
なかまの骨です

夜　あなたはどこで寝たのだろう
スワン川の岸辺を　歩きまわっていたころ
ひょっとしたら　カーラーマンダまで　歩いて
どんどんと
沼をすぎ　アシの茂みをすぎ
ジャムやアカシアの種を　あつめたのだろうか

アシの束を頭にのせて　泳ぎ
眠っているアヒルを　水のなかにひきずりこむ
あなたは　雨の感触
稲妻のきらめき　雷のさく裂を　肌で知っていた

そうですよね　骨さん　あなたは生きるすべを　知っていた
白いひとの　とりきめなんぞ　いるものか
目に見えるものは　あなたのもの　至高の
大地と空　夢から生まれた
あなたの創造

まぼろしは消え　わたしが見るあなたの夢は
うす暗いへやに　どやどや侵入してきた子らに破られる
わたしはそっと　ショーケースにふれる　記念だから
すると骸骨が　〝勇気と〟と小声でいうのが
闇からうす暗がりをつきぬけて　聞こえてくる

ご静聴を、ありがとうございました。

（竹内佑利子訳）
（たけうち・ゆりこ／経営学部助教授）